

野口啓子氏学位請求論文審査報告

論文： *Harriet Beecher Stowe and Antislavery Literature in America:
Another American Renaissance*

I. 論文の要旨

本論文は、アメリカ合衆国の女性作家ハリエット・ビーチャー・ストー (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) の『アンクル・トム的小屋』 (*Uncle Tom's Cabin*, 1852) を中心とする反奴隷制文学が、19 世紀中葉のアメリカン・ルネッサンス期に隆盛を迎え、一つの文学ジャンルを形成したことを検証するものである。同時に、この新しい文学ジャンルがアンテベラム期のみの一時的現象ではなく、古くは 18 世紀末から 19 世紀初頭の世紀転換期にその萌芽があり、1850 年代の隆盛期を経て、ポストベラム期以降のアメリカ近・現代文学に脈々と受け継がれていったことを明らかにしようとするものでもある。トマス・ジェファソン (Thomas Jefferson) が独立宣言で謳った「イギリスへの隷属からの自由」は、反奴隷制文学において黒人奴隷とその解放というアナロジーを提供し、自由・平等を掲げた民主主義国家の理念の矛盾を突きつけることになった。それはさらにルネッサンス期のアメリカ文学において、社会的制約と個人の自由との超越主義的なせめぎ合いとも結びつき、その後は普遍的な「社会と個人」の問題として現代アメリカ文学に浸透していくことになる。本論文はこのようなパースペクティブにたち、アメリカ文学における反奴隷制文学を再評価するとともに、その系譜を通時的に考察するものである。

第 I 部は、萌芽期の反奴隷制文学として、デイヴィッド・ウォーカー (David Walker) の『世界の黒人市民への訴え』 (*David Walker's Appeal to the Coloured Citizens of the World*, 1829) とリチャード・ヒルドレス (Richard Hildreth) の『奴隷』 (*The Slave*, 1836) を分析し、この時期の反奴隷制の言説の特徴を論証する。前者はジェファソンの「独立宣言」への論駁として、また、後者はストーの『アンクル・トム的小屋』に影響を与えた作品として考察している。

第 II 部は、ストーの奴隷制を扱った 3 作品、『アンクル・トム的小屋』、『ドレッド』 (*Dred*, 1856)、『牧師の求婚』 (*The Minister's Wooing*, 1859) を取り上げ、ストーの反奴隷制の言説がアメリカ社会の変化とともに、どのように変容していったのかについて、同時代の他の作品との間テクスト性を視座に据えつつ、検証している。ここではまず、『アンクル・トム的小屋』がもちえた影響力の大きさについて、その鍵となるキリスト教を基盤とする「感傷力」について分析するとともに、白人女性作家としてのストーの、人種観の限界をも明確にする。また、『アンクル・トム的小屋』は、黒人をアメリカ人と認めないと読める結末など、とりわけ黒人社会から批判を受けることになるが、アメリカの社会情勢が南北戦争へ向けて緊迫の一途をたどるなか、ストーがこのような批判や社会の変化を『アンクル・トムの小

屋』以降の作品にどのように反映していったのかについて考察している。

第 III 部は『アンクル・トムの小屋』が大きな契機となった 19 世紀中葉の反奴隷制文学の隆盛について、同時代を生きた第 16 代大統領エイブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)の演説、ウィリアム・ウェルズ・ブラウン (William Wells Brown) の『クローテル』(*Clotel*, 1853)、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) の自伝『私の束縛と私の自由』(*My Bondage and My Freedom*, 1855)、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の「ベニト・セレノ」(“Benito Cereno,” 1855)、ハリエット・E・ウィルソン (Harriet E. Wilson) の『うちの黒んぼ』(*Our Nig*, 1859)、ハリエット・ジェイコブズ (Harriet Jacobs) の『ある奴隷娘に起きた出来事』(*Incidents in the Life of a Slave Girl*, 1861) の各作品を論じる。それぞれのテキストの文学的特徴について分析しつつ、『アンクル・トムの小屋』との親和性と異質性について考察する。後者の「異質性」はとくに、この小説への批判的距離としてとらえ、反奴隷制文学の多義性、多様性へつながるものとして、奴隷制をめぐる議論の深まりに注視する。

第 IV 部はポストベラム期以降の反奴隷制文学として、リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child) の『共和国のロマンス』(*A Romance of the Republic*, 1867) とマーク・トウェイン (Mark Twain) の『ハuckleberry・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) の 2 作品を選び、反奴隷制小説が、アンテベラム期だけの一時的な文学運動だったのではなく、その主要なテーマが現代アメリカ文学へと受け継がれていったことを例証する。具体的には、第 III 部で論じたダグラスの自伝のタイトルが直接的に示唆する「束縛と自由」のテーマがアンテベラム期から現代へと続く冒険物語の系譜につらなり、『共和国のロマンス』が扱う、黒人の血が一滴でも混じれば黒人とみなす「一滴規範(one-drop rule)」のテーマが 19 世紀の文学に遍在するばかりでなく、20 世紀のバッシングの物語につながることを論じている。

本研究の主たる特徴として以下の 3 点が挙げられる。1 点目はハリエット・ビーチャー・ストーの一連の奴隷制を扱った小説、『アンクル・トムの小屋』、『ドレッド』、『牧師の求婚』を反奴隷制小説として系統的に分析し、再評価を試みていることである。ストーの作品、とりわけ『アンクル・トムの小屋』は、政治的プロパガンダを目的とした「お涙頂戴もの」として長らくアメリカ文学史のキャノンから除外されてきたが、感傷小説という文学形式を基軸にこれを再評価したのは、ジェイン・トムキンズ(Jane Tompkins)の『センセーショナル・デザインズ』(*Sensational Designs*, 1985)であった。本論文ではトムキンズの議論に依拠しつつ、『アンクル・トムの小屋』を文学作品として見直したうえで、反奴隷制の言説に詳細な考察を加えている。また、その後に発表された『ドレッド』、『牧師の求婚』については、アメリカ社会が南北戦争に向けて南北対立が激化していくなかで、ストーの反奴隷制の言説がどのような変化を遂げるのか、系統的な分析を試みている。

2 点目は、ストーの『アンクル・トムの小屋』が同時代の他の作品に与えた影響について網羅的に考察していることである。奴隷制をめぐる議論が当時のアメリカにおいて新聞、雑誌や冊子など様々なメディアの紙面を占め、相互に影響を与え合っていたことに鑑み、その間テキスト性に留意しながら、小説に加え、当時、多数出版されていたスレイヴ・ナラティブやアメリカ文学の特徴の一つである演説も反奴隷制文学として総括的に論じたことに際立った特徴がある。さらには、これらの作品をストーとの影響関係を基軸にして明晰に論じている点に本論文の独自性がある。

3 点目の特徴は、上記の考察を踏まえたうえで、ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心とした反奴隷制文学がルネッサンス期アメリカ文学において一つの文学ジャンルを形成していることを立証したことである。イギリスの作家ジョージ・エリオット (George Eliot) はストーを「ニグロ・ノヴェル」の創始者と呼び、『アンクル・トムの小屋』を含むストーの一連の反奴隷制小説を高く評価した。またスレイヴ・ナラティブの代表作の一つを著した 19 世紀の黒人指導者ダグラスは、ストーの『アンクル・トムの小屋』が及ぼした絶大な影響力に言及し、この時代が後に、「反奴隷制文学の時代」として記憶されるであろうと述べた。本論文は、この二人の作家の主張に着目し、19 世紀中葉に発表された奴隷制をめぐる様々な言説を反奴隷制文学として包括的に論じ、これらが一つの新しい文学ジャンルを形成したととらえる。先述したトムキンズは、1850 年代に次々とベストセラー作品を発表した女性作家の家庭小説を一つの文学現象とみなし、同時代の女性文学の隆盛を「もう一つのアメリカン・ルネッサンス」(the Other American Renaissance)と呼んだ。ラルフ・ウォルドー・エマソン(Ralph Waldo Emerson)、ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau)ら白人男性作家中心に文学キャンオンを構築した 20 世紀を代表する批評家の一人、F・O・マシセン (F. O. Matthiessen) の『アメリカン・ルネッサンス』(*American Renaissance*, 1941) に対抗してのことである。本論文の独自性は、同時期に起こった人種・ジェンダー・階級の視点を踏まえた反奴隷制文学の高まりについても、「もう一つのアメリカン・ルネッサンス」(another American Renaissance)だったと論証し、位置付けた点にある。

II. 論文審査の要旨

本論文は、19 世紀半ば、アメリカン・ルネッサンスと呼ばれる白人男性作家を中心とする文学とほぼ同時期に興隆した反奴隷制文学が、一つの文学ジャンルを形成していたことを検証しようとする意欲的な試みとして、高く評価できる。この試みは、ストーの『アンクル・トムの小屋』を中心とする反奴隷制小説の、詳細で独自性に富む分析にとどまることなく、反奴隷制文学に関する膨大なテキストと国内外の資料を渉猟したうえで検証され、きわめて説得力のあるものとなっている。

第 I 部では、反奴隷制文学の先駆的作品として、ウォーカーの政治的文書『世界の黒人市民への訴え』とヒルドレスの『奴隷』が分析される。前者はジェファソンの「独立宣言」への論駁であるが、ジェファソンの矛盾した態度に対する批判は、さらに第 III 部のブラウンの、ジェファソンの娘とされる主人公の運命を扱った『クローテル』についての議論に引き継がれ、深められている。

第 II 部では、ストーの一連の奴隷制を扱った小説、『アンクル・トム的小屋』、『ドレッド』、『牧師の求婚』に焦点を当て、ストーの反奴隷制の言説が社会の変化とともにどのように変容していったのかが検証される。とりわけ最後の『牧師の求婚』については、先行研究において反奴隷制文学として研究される例は稀有であり、奴隷制への具体的な解決策を示した作品と位置付ける本論文の主張は、ストー研究に斬新な視点を提示したといえる。

第 III 部では、『アンクル・トム的小屋』後の反奴隷制文学が検証される。ストーと同時代の大統領リンカーンを評価することに始まり、元奴隷の男性作家による『クローテル』のほか、二つの重要なスレイヴ・ナラティヴ、ダグラスの『私の束縛と私の自由』およびジェイコブズの『ある奴隷娘に起きた出来事』に光を当て、ストーの作品との親和性と異質性を検証するとともに、白人女性としてのストーの言説の限界についても明確にした。また、北部の自由黒人女性を扱ったウィルソンの『うちの黒んぼ』は、作者についての情報がきわめて少なく、批評家の間でも自伝かフィクションかで意見がわかれているが、黒人によるスレイヴ・ナラティヴと、フィクションにおける黒人の声をつなぐ役目を果たす作品として分析する視座に独自性が認められる。また、奴隷船における奴隷の反乱を扱った、メルヴィルの問題作「ベニト・セレノ」も反奴隷制文学として位置付けている。従来、反奴隷制文学という枠におさまりにきれない特徴が多いとされてきた問題作ゆえ、さらなる議論も必要ではあるが、意欲的な解釈に基づき、新規な論点を編み出した点は高く評価できる。

第 IV 部ではさらに、南北戦争後の反奴隷制文学として、チャイルドの『共和国のロマンス』とトウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』に着目する。前者については、奴隷解放に強い関心を寄せていたチャイルドが、当時タブー視されていた異人種間結婚をも視野にいれて、南北戦争後の社会を描こうとした作品だが、本論文は作家の白人女性としての偏見や限界も指摘しつつも、当時の社会基準としてはラディカルな作品であったことを明解に論じている。後者については、アメリカ文学の代表作とみなされる一方、主人公ハックの粗暴な言葉遣いや差別的な表現を理由に危険図書として図書館から追放されてきた経緯もあるが、本論文は、ハックと奴隷のジムをめぐる「束縛と自由」のテーマや、作品に描かれた南部社会の暴力性に焦点を当てて、本作品を反奴隷制文学として読み直すことを試み、説得力ある展開となっている。

結論では、『アンクル・トム的小屋』を中心とする反奴隷制文学がいかに 19 世紀中葉に新しい文学ジャンルを形成したかについて論じるとともに、反奴隷制文学のゴシック性、

近親相姦、パッシングの問題についても俎上に載せ、新たな研究の可能性を明示している。さらに、トニ・モリスン (Toni Morrison) の『ベラヴィッド』 (*Beloved*, 1987) にも論及し、反奴隷制文学が、現代のアフリカ系アメリカ人作家が取り組んでいるネオ・スレイヴ・ナラティヴにつながる可能性を射程に入れた通時的な主張についても高く評価できる。

明達な読みと洞察に富む分析力に支えられた説得力のある文章で綴られ、アメリカ現地での調査・研究をも含め、長年の研究の蓄積が見事に結集された秀逸な論文となっている。各章独立した論文としても読めるが、反奴隷制文学の系譜をたどりつつ通時的に論が発展し深化していく巧みな構成は博士論文として高く評価できる。とくに評価できる優れた点として、次の3点をあげる。

1点目は、『アンクル・トムの小屋』、『ドレッド』、『牧師の求婚』の3作品を反奴隷制小説として系統的に分析し、再評価を試みた点である。これらの作品についての個別の研究は数多くあるものの、「反奴隷制の言説」という視座からの系統的な先行研究はほとんど見受けられず、とりわけ『牧師の求婚』を奴隷制の問題と結びつけて論じた先行研究は稀有である。この点においても本論文は際立って独自性に富み、ストーリー研究に斬新な視座を開くことに寄与している。

2点目は、『アンクル・トムの小屋』が同時代の他の作品に与えた影響について、人種やジェンダー、ジャンルをも超えて網羅的に考察し、分析している点である。奴隷制をめぐる議論が当時のアメリカの様々なメディアにおいて、相互に影響を与え合っていたことに鑑み、小説に加え、奴隷経験者が自らその経験を語るスレイヴ・ナラティヴや奴隷問題で国家分裂の危機にあった時代の政治家の演説をも反奴隷制文学に含めて、総括的に論証した。さらには、これらの作品をストーリーとの影響関係を基軸に論じているところに本論文の顕著な独創性があり、この点を高く評価できる。

3点目は、上記の考察を踏まえたうえで、ストーリーの『アンクル・トムの小屋』を中心とした反奴隷制文学がアメリカン・ルネッサンス期文学において一つの文学ジャンルを形成していることを論証した点である。マシセンの大著『アメリカン・ルネッサンス』を見直す動きが活発化しているが、エリオットがアメリカ文学の最も顕著な特徴としてとらえた奴隷制に着目した先行研究は少ない。この点で、1850年代に次々と発表された反奴隷制の言説を一つの文学ジャンルとして位置付け、これらをして「もう一つのアメリカン・ルネッサンス」であったとする可能性を探った本論文は、アメリカ文学史再編に貢献し得る内容となっている。

以上のように、アメリカ文学史再編に貢献し得たいへん意欲的な論文ではあるが、今後の発展的な研究課題としては、次の2点が指摘された。

1 点目は、第 I 部の反奴隷制文学の先駆けとなった作品に関する展開である。ストーリーの 3 部作にいたる前の反奴隷制の言説として、ウォーカーの『世界の黒人市民への訴え』とヒルドレスの『奴隷』の 2 作品が論じられているが、『アンクル・トム的小屋』以前に何編もの反奴隷制文学が出版されていた一方で、奴隷制擁護の小説も早い時期から存在していた点も見逃せない。もう一つの博士論文になり得るほどの大きなテーマではあるが、今後は、奴隷制擁護の小説とのより深い関連性を射程に入れ、『アンクル・トム的小屋』以前の反奴隷制小説の議論がさらに多面的に検討されることを期待したい。

2 点目は、結論部分で新たな研究の可能性として指摘されている、反奴隷制文学のゴシック性、近親相姦、パッシングの問題についてである。これらの問題も、膨大な資料の調査と分析を必要とする研究テーマではあるが、今後、アメリカ文学の重要なテーマが系統的に論じられることに期待したい。

審査結果

審査委員会は、本論文が、「もう一つのアメリカン・ルネッサンス」としての反奴隷制文学を論考するにあたり、十二分な資料収集と論理的かつ明晰な分析を行っている点で、学術論文として高い水準にあること、また先行研究を俯瞰的に踏まえつつ、新たな文学ジャンルを提示している点で、独創的な視座が提供されていることから、当該分野に貢献する秀逸な論文と認めた。これをもって、申請者に博士（文学）の学位を授与することを全員一致で決定した。

2021 年 11 月 17 日

論文審査委員（主査）	津田塾大学	教授	池野 みさお
		教授	高橋 裕子
		名誉教授	椿 清文
	神奈川大学	名誉教授	山口 ヨシ子